

辺境の怪書、歴史の驚書、
ハードボイルド読書合戦

はじめに

読書というのは、基本的には孤独な楽しみなのだろう。ただ、ほんとうに面白い本を読んだとき、人は「誰かとの本について語り合いたい」という強い欲求におそわれる。特に、それが知的刺激の強い本であればあるほど、「その道の見識ある人の意見を聞きたい」と思う。とはいえ、その一方で、その分野の専門家を前にして自分の無知を思い知らされるのもいたたまれない。それならむしろ、「気の置けない友だちとその本について好き放題にしゃべりたい」とも思う。何を隠そう、読書好きの、このわがままで不可能に近い欲求を同時に叶えたのが本書なのである。

私たち二人は、「世界の辺境を旅するノンフィクション作家」と「日本中世の古文書を研究する歴史家」として、これまで特に接点もなく過ごしてきたのだが、ひよんな出会いから『世界の辺境とハードボイルド室町時代』（集英社インターナショナル）という対談本を刊行した。「世界の辺境」と「日本中世」というお互い交わるはずのない社会の奇妙な一致や相違点を奔放に語り合った、この他流試合は、「超時空比較文明論」として多くの人に楽しんでもらえたようだし、何よりしゃべっている当人たちがそれを一番楽しんだ。

そんなわけで、前著の続編を、という話は早くからあったのだが、これには意外にも高野さんのほうがストイックな姿勢を示した。いわく、前著は「世界の辺境」と「日本中世」のミスマッチのインパクトがウケたのであって、二番煎じは当然、そのインパクトが薄らいでしまう。コンビは解消して、これからはお互いの専門分野に立ち返るべきである。なるほど、まったくの正論である。私もそれに同意した。

ところが、二人の奇縁は仕事とはまったく関係ないところで、その後も途絶えることなく続き、一緒に飲み喰いなどする機会が重ねられた。もちろん、二人のバックグラウンドはかなり違うのだが、会うと必ず話題に出るのが、最近読んだ本の話。あるとき、特に高野さんが私に強く感想を求めてきたのが、J・C・スコットの『ゾミア』だった。話を聞いてみると、確かに面白そうな本だ。それなら読んでみてもいいな、と応じたところ、高野さんは『ゾミア』だけと言わず、これからお互いに共通の本を読んできて、それを素材に語り合う読書会形式の対談なんかをやったら、面白いのではないかと提案してきた。ちょうど、その場に前著の編集者も同席していたために彼女もこれに飛びつき、結局、あれよあれよという間に、この企画が走り出した。

え？ 最初のコンビ解消宣言はどこへ行ったの？ と思わなくもなかったが、すでに高野さんは夢中になっていたし、冒頭に述べた通り、ふだん読むことのないジャンルの本を最高のナビゲーターとマンツーマンで読めて、なおかつ気を使わなくてもいいのなら、これ以上楽しいことはない、と思い、私も喜んでこれに同意した。

そんな経緯で生まれたのが本書である。対談は三カ月に一回のペースで八回、二年間におたつて行われ、そのエッセンスは集英社の季刊誌『Kotoba』に連載された。次の課題図書は一つの対談を終えるたびに、そのつど考える、という行き当たりばつたりの姿勢で臨んだが、結果的に、それによって一つの本から生まれた疑問をもとに次の本が選定され、さらに考察が深まるという、毎回の話題に柔らかない連関が生まれたのではないかと思う。そこで扱われる世界も、「ボーダレス社会」(一・二・三章) ↓ 「自力救済社会」(三・四・五章) ↓ 「無文字社会」(六・七・八章)と、ゆるやかに変移している。もう少しカッコよくいえば、それぞれ無意識に〈民族〉〈国家〉〈言語〉が主題になっている。本書は、二人のお気楽な読書体験録として読んでもらってもうれしいが、読みようによっては、そういった重要な問題群を考える何らかのヒントになるかもしれない。

歴史をひもとけば、地球を駆けまわれば、私たちの社会とは異なる価値観で動く社会がたくさんある。「今、生きている世界がすべてではない」「ここではない何処かへ」という前著のメッセージに共感してくれた読者の皆さんの期待を、本書も裏切らない内容であると思うし、前著を読んでいる方々にもきつと楽しんでもらえるのではないかと思う。私たちの読書会の三人目の参加者として、どうか新たな超時空比較文明論を楽しんでもらいたい。

清水克行

第一章

『ズミニア』

——文明は誰のもの!?

はじめに

3

「文明から未開へ」逆転の歴史観

15

遊牧や狩猟採集も国家の管理から逃れる生活スタイル?

20

日本のゾミアはどこにあったのか

23

ワ人はワ人ではなく、倭人は倭人ではない

29

輸送と移動のリアリティ

35

リーダーを生まず、文字を捨てるという知恵

38

第二章

『世界史のなかの戦国日本』

——世界に開かれていた日本の辺境

43

最先端の辺境に富が蓄積される

45

日本は中国の日の本で、日本の日の本は蝦夷地

48

外交・通商のアウトソーシングを担う悪徳エージェント

52

ソマリ人と倭寇がマラッカで遭遇?

54

倭寇の後継者・秀吉のマッコイなコンプレックス

57

琉球の公用文字はなぜ「ひらがな」だったのか

62

バックパッカー・ザビエルと代表的日本人アンジロー

64

グローバルヒストリーからこぼれ落ちる世界の広さ

66

第三章

『大旅行記』全八巻

——イブン・バットゥータ三〇年の旅の

69

壮大にして詳細な記録

イスラムのパワーと慈善思想が可能にした大旅行

71

寛大すぎて暴虐すぎる王の支配

74

外部の力を借りてローカルな神を克服する

77

主人公の遭難と遠大なる伏線回収

80

第四章

『将門記』

——天皇を名乗った反逆者のノンフィクション

日本史上最大の反乱を描く中立的ノンフィクション？

リアルで不思議な戦闘シーン

危険思想の体現者にして、折り目正しき律儀者

将門が見た夢を頼朝が見なかったのはなぜか

匿名作家は誰に何を伝えたかったのか

女好きの旅行家がたどり着いたりゾートアイランド

ソマリ人はなぜコメを食べ、腰巻をするのか

ベントの一大産地だったキブチャク草原

じわじわ伝わるイスラム、鉄砲玉を送り込むキリスト教

コロンプス以前、ハシシはどうやって摂取したか

マルコ・ポーロを凌駕する情報の質と量

97

99

101

105

111

114

第五章

『ギケイキ』

——正義も悪もない時代のロードムービー的作品

善悪を超えたピカレスクロマン

中世の社会と人々の心性を義経が自ら徹底解説

武士とヤクザが一体だった時代

オレたちの頼朝、オレたちの鎌倉

豪傑キャラの弁慶がツイッター攻撃に走る訳

敗者復活と流浪の旅を描くロードムービー

119

121

124

126

129

131

134

第六章

『ピダハシ』

——あらゆる常識を超越する少数民族

「藤木式メモ」

数もない、左右もない、呪術も神話もない

直接体験しか信じない人々に神の言葉を伝えられるか

141

143

144

148

第七章

『列島創世記』

——無文字時代の「凝り」

あるものを食べ、昼夜を区別せず、わりと簡単に不倫し、ふざけ合う子どもを子ども扱いせず、カヌーをつくれるのにつくらぬ伝道師兼言語学者が疑いを抱いた「普遍性」というモチーフ
逃走の過程で文化を純化させていったのか

163 160 158 155 151

認知考古学の衝撃

169

ネッシーやUFOに惹かれるホモ・サピエンス

172

照葉樹林文化論をバツサリ否定

174

大旅行家が記録していたアフリカの稲作

177

凝りは成熟か、退廃か

180

ヤマトの「ヤ」の字も出てこない

183

権力者はなぜモノUMENT造営に走るのか

186

ナウマンゾウ、メイン?

189

弥生の戦いの起源は何だったのか

191

第八章

『日本語スタンダードの歴史』

——標準語は室町の昔から

伊達政宗が「田舎者」を自覚した瞬間

197

「なにをいっているのかわからぬ」島津軍?

199

東京語が標準語になったのではなく、標準語が東京語をつくった

201

スタンダードが拙い坊っちゃん、マルチリンガル福沢諭吉

205

外国人学生にとってマンガが日本語テキストになる訳

207

文語体の制約が名文を生み出す

209

永遠の真理「強調表現は陳腐化する」

211

おわりに

217

第三章

『大旅行記』全八巻

——イブン・バットウータ三〇年の旅の
壮大にして詳細な記録



『大旅行記』

イブン・バットゥータ著、イブン・ジュザイイ編、
家島彦一訳注／平凡社東洋文庫・全8巻／
各3000円＋税、7巻のみ2900円＋税

14世紀、マリーン朝（現モロッコ）のイスラム法学者イブン・バットゥータ（1304～1368／1369／1377年）は、21歳でメッカ巡礼の旅に出ると、以後約30年をかけて当時のイスラム世界のほぼ全域を遍歴した。帰郷後、イブン・ジュザイイによって編纂されたのが本書で、アラビア半島、東西アフリカ、アナトリア地方、南口シア、中央アジア、インド、東南アジア、中国、イベリア半島など広範囲にわたる地域の自然、歴史、政治、社会、文化、そしてさまざまな奇譚が紹介されている（一部は伝聞や他の書物からの引用によって構成された可能性が高い）。正式書名は『諸都市の新奇さと旅の驚異に関する観察者たちへの贈物』。抄訳『三大陸周遊記』（前嶋信次訳）が角川文庫などから出版されている。

家島彦一

やじま ひこいち

東京外国語大学名誉教授。1939年、東京生まれ。慶應義塾大学大学院博士課程中退。文学博士。専攻はイスラム史、東西交渉史。イスラム世界を広く旅し、各地の自然、社会、歴史の現場に身を置いて考える「現地学」の重要性を説く。主な著書に『イスラム世界の成立と国際商業』（岩波書店）、『イブン・バットゥータの世界大旅行』（平凡社新書）、『イブン・バットゥータと境域への旅』（名古屋大学出版会）など。訳注書もイブン・ファドラーン著『ヴォルガ・ブルガール旅行記』、イブン・ジュバイル著『メッカ巡礼記』（いずれも平凡社東洋文庫）など多数。

イスラムのパワーと慈善思想が可能にした大旅行

高野 前回は、中世日本の辺境が実は外に開かれていて、国際社会のエントランスになっていたという話をしました。じゃあ、当時の国際社会はどんなふうに広がっていたのかというわけで、今回はイブン・バットゥータの『大旅行記』を選んだんですけれども。この本、全八巻あって、すばらしく長いんですね（笑）。

清水 この機会がなければ、僕もおそらく読むことはなかったと思いますよ。イブン・バットゥータと足利尊氏^{*1}が一歳違いということも初めて知りました。高野さんは読んでみて、どうでした？

高野 まず、イスラムのパワーを感じましたね。なにしろ、どこまででも「イスラムづたい」で行けちゃうでしょ。中東だけでなく、北アフリカも中央アジアもインドも東南アジアも。中国にもイスラム商人がいて居留地があった。ということは、そういう地域にはイスラムの戒律に沿ったハラル^{*2}フードがあったっていうことじゃないですか。外国に行ったムスリムが一番困るのは食べ物なんです、その点の心配もなかった。それにどこへ行っても、たいていアラビア語が話せる人がいて、言葉でも困らない。今のアメリカ人がどこに行っても英語が通じて、マクドナルドのハンバーガーが食べられるみたいな感じですよ。

清水 イブン・バットゥータが聖地メッカ^{*3}の巡礼をきっかけに三〇年間も旅を続けら

*1 足利尊氏（一三〇五～五八）

室町幕府初代将軍（在職一三三八～五八）。後醍醐天皇が鎌倉幕府打倒を目指して挙兵した際、それに呼応して六波羅探題を滅ぼした。その後、建武政権に背き、光明天皇（北朝）を擁立し、室町幕府を開いた。なお、清水が書いた尊氏の伝記に『足利尊氏と関東』（吉川弘文館）がある。

*2 ハラルフード
イスラム戒律に沿った食べ物。一般的には、豚肉、酒、イスラムの作法に従わないで屠畜された動物の肉などが少しでも含まれると、ハラルフードとみなされませんが、国や地域、時代、宗派や個人によって解釈にはかなりズレがある。

*3 聖地メッカ
サウジアラビア中西部の都市。ムハンマドの生誕地で、イスラム教の最高の聖地。

れた経済的裏づけとしては、イスラムの慈善思想もありますよね。

この本にはメッカのことも詳しく書いてあって、あそこでは、眠っている人を見つけると、その人が目をさますまで口にお金を入れ続けるとか、孤児が市場で買い物客の荷物を運ぶのを手伝うと駄賃を与えるとか、とにかくみんながお金を放出する。あまりに喜捨が多いので金価格が下落したというぐらいい。

日本の室町時代にも、お金持ちは貧しい人に相応に恵んであげるべきだという「有徳思想」があったんですけど、スケールが違いますよね。慈善思想が習慣化して社会が回ってる感じ。だから、物乞いでもメッカに来れば、なんとか生きていける。

高野 みんながメッカを目指す仕組みになってるんですよね。

もう一つ、僕が読んでいて印象的だったのは、この時代はイスラムの神秘主義者「スーフィー」の全盛期だったんだということですね。当時は、スーフィーが布教の原動力になっていて、彼らの修道場（ザウウィヤ）が至る所にあつて。

清水 旅行者はそういうイスラム施設をたどっていけば、泊まれるし、食べ物ももらえて、長旅が続けられちゃう。

高野 特にイスラムの学識がある人はすぐもてなされて。イブン・バットゥータもイスラム法学者ですけど、旅立ちのときは二一歳の若造だったのに、各地で歓待されてるんですよね。嫁をもらったりとか。

今はワッハーブ派に代表されるイスラム厳格主義が全盛で、奇跡や超能力を肯定す

る傾向のあるスーフィーは肩身が狭いんですけど、この頃はそうじゃないんですよ。イブン・バットゥータ自身もスーフィーだし。話はずれるけど、僕はこの人の超能力は記憶術だと思うんですよ（笑）。

清水 ああ、途中でトラブルに遭って、身ぐるみ剥がされたりもしていますもんね。メモも残っていないはずなのに、帰国するまで旅の情報が頭の中に残っているんですからね。

高野 イブン・バットゥータはダマスカスでイブン・タイミーヤとも会っているんですよ。

清水 それはどういう人でしたっけ？

高野 厳格主義で知られるハンバル派で、スーフィー的な神秘主義やイスラム法学者の世俗的学問傾向に反対していて、コーランや預言者ムハンマドの教えに忠実であれ、みたいな主張をしていた人です。

清水 イブン・バットゥータのスタンスとは真反対？

高野 もう真反対。要するにその、イブン・バットゥータって足利尊氏の……。

清水 一歳上ですね。

高野 だから、たとえて言うと、イブン・タイミーヤは日蓮みたいな人なんです。排他的で、キツイことを言うので、多くのイスラム法学者や政治権力と対立していて、この時期は牢獄に入れられていたはずだと、訳注者の家島彦一さんは注で解説してい

カーバ神殿があり、全ムスリムの巡礼の地。

***4 有徳思想**

日本中世独特の社会経済思想。経済的な利得と人格的な徳望を同一視し、経済的な富裕者を人格的な優良者と認識する福徳一致思想。経済力のある者は応分の社会貢献をすべきだとする善捨強制の思想ともなった。

***5 スーフィー**

清貧を良しとし、修行や思索によって神に近づき、最終的には無我と恍惚の境地において神と一体化することを目指す人々。名称は修行者が羊毛（スー）の衣をまとっていたことに由来するとされるが、諸説ある。

***6 修道場**

スーフィーの修行する道場。旅人や巡礼者は無料でこの施設に寝泊まりし、食事も与えられた。多くの場合、これらの修道場は土地

の有力者の寄付によって運営されていた。

***7 ワッハーブ派**

一八世紀半ばアラビア半島に起こったイスラム復古主義的な改革運動。初期のイスラムの教えから逸脱する要素を厳しく批判、排除する。現代はサウジアラビアやカタールなどワッハーブ派を信奉する湾岸諸国が世界各地にモスクやマドラサ（宗教学校）を建設、世界のイスラムが厳格化する大きな要因となっている。

***8 ダマスカス**

現在のシリアの首都。三〇〇年以上前から中東世界の中心地の一つ。

***9 イブン・タイミーヤ**

（一二六三—一三二八）イスラム法学者。現在のシリアに生まれ、ダマスカスで没した。コーランとスンナ（預言者ムハンマドの言行）こそ信仰の基本である

ますね。イブン・パットゥータはイブン・タイミーヤがダマスカスで説教するのを聞いたと書いています。

そのイブン・タイミーヤの教えに強い影響を受けて一八世紀に登場したのがワッハブ派で、今はサウジアラビアの国教になっていて、他の湾岸諸国でも強い勢力をもっているんですね。アルカイダや「イスラム国（IS）」の信仰もこの教えの延長線上にあって、各地にあるスーフィーの聖者の廟を壊して回っているわけです。つまりイブン・パットゥータの時代とは立場が逆転しているんですね。

寛大すぎて暴虐すぎる王の支配

清水 僕がこの本の中で一番読み応えがあるなと感じたのは、インド（トゥグルク朝）^{*13}について書かれている第五巻ですね。まず入国にあたって、イブン・パットゥータは王様を訪ねて贈り物を差し出しますよね。そうすると、大金とか礼服とか馬とか、あり余るほどのものが下賜されるじゃないですか。だから借金してでも、まず贈り物を買う。

高野 贈り物を調達してくれる商人がいるんですね。彼らはその後、「借金返せ」ってイブン・パットゥータに返済を迫ってくる。

インドでは入国のとき「永住」が条件になるというのも面白かった。そんなイミグ

レーション、初めて知った（笑）。

清水 入国した以上は、王様の人徳の前にひれ伏して政府の構成員になる。イブン・パットゥータは八年間、法官として仕えますけど、その間に王様から下賜されたものは基本的にインド国内で消費しなくちゃいけなかったんでしょね。

高野 そのインドの王様スルタンムハンマド（ムハンマド・ビン・トゥグルク）は、この本に出てくる人たちの中で最高のキャラですよ（笑）。

清水 名脇役ですよ。「この王は、人に恵み与えることを誰よりも好まれ、「時にまた他人の」血を流すことを最も好みになっていた。従って、彼の門前からは、金品を恵まれた乞食たち「の列」が絶えず、時にまた、生ける命を絶たれた者たち「の死体」が絶えなかった」と書かれている。尋常じゃないですね。

高野 振れ幅がめちゃめちゃかい。

清水 ある日、イブン・パットゥータが宮殿に出かけると、地面に白い塊のようなものが落ちていて、「これは何か」と周囲に尋ねると、「それは三つに切断された男の胸の部分です」。

高野 宮殿の門前に処刑された死体が投げ出されているんですね。

清水 もうやめてくださいっていうぐらい残酷な刑罰がいっぱい出てくるんですが、なかでも、このスルタンの得意技は、生きたままの人の皮を剥いで、皮にわらをつめてさらすという刑で、何度もやりますよね。日本ではケガレ観念のほうが強くて、

としてその原点に帰ることを強調する。彼の思想は、ワッハブ派を生み出し、近現代のイスラム改革運動の出発点となっている。

*10 日蓮（一二三三〜八二二）

鎌倉新仏教の一つ、日蓮宗の開祖。南無妙法蓮華經の題目を唱えることによって救済されると説いた。辻説法によって他宗を排撃し、国難を予言して『立正安国論』を著し、鎌倉幕府より処罰される。佐渡流刑後、甲斐国に久遠寺を開いた。

*11 アルカイダ

オサマ・ビン・ラディンが率いた国際的なイスラム過激派組織。二〇〇一年のニューヨーク同時多発テロで中心的役割を果たした。世界各地の過激派組織を傘下においている。

*12 イスラム国（IS）

アルカイダから分かれたイスラム過激派勢力。二〇一四年に指導者のアブ・バクル・アル・バグダーディーが預言者ムハンマドの後継者が統治するカリフ制の国家樹立を宣言。一時はシリア・イラクの広い地域を支配下に置いた。米英仏を中心とした有志連合の空爆やシリア、イラクの政府軍、さらには他の武装勢力の攻撃により、一七年一〇月には壊滅に近い打撃を受けている。

*13 トゥグルク朝（一二二〇〜一四一一）

インドのイスラム王朝（デリー・スルターン朝）の一つ。ハルジー朝に変わってギヤースウッディーン・トゥグルクが建国し、デリーを首都とした。九代続いたが、チムールの侵攻を受け、サイイド朝に滅ばされた。

*14 スルタンムハンマド（一二九〇頃〜一三五二）

こういう残酷刑は発達しないでしょう。

あと、首都デリーの住民が彼を批判する紙片を宮殿に投げ込んだら、住民をみんな強制的に引越させて、都を破壊しつくすじゃないですか。

高野 首都をダウラト・アーバード^{*15}(ダウラタバード)に移転してしまふんですね。

清水 しかも、やるのがすさまじくて、「残っている者すべてを捜し出すべし」と命じて、路地で見つかった乞食らしき二人のうち、一人を大型の石弩砲^{マンジャニーク^{*16}}でぶっ飛ばし、もう一人をダウラト・アーバードまで四〇日かけてひきずっていくように命令する。そして、廃墟と化したデリーの町を宮殿の屋上から眺めて、「ああ、これでやっと、わしの気分も落ち着き、せいせいしたわい!」と言う。

高野 暴君、ここに極まれり。トゥグルク朝はトルコ系のイスラム政権で、それがヒンドゥー教徒のインド人たちを征服して支配しているわけですよ。だから、かなり荒っぽくやらないと統治できなかったんですよ、きっと。

清水 ただ、先日、この話を、讀賣新聞の読書委員^{*17}をご一緒していて世界史にも詳しい出口治明^{*18}さんしたら、「あれはかなり計画的な新都市建設だったのでないか」と言われました。ちなみに出口さんも『大旅行記』全巻を通読して、興味をもってダウラタバードに実際に行ってしまったそうです。この首都移転と強制移住については、訳注者の家島さんも、スルタンの一時的な思いつきではなくて、周到な準備の末に実行されたと説明していますね。

高野 ひょっとしたら、イブン・バトゥータにはそのへんの政策意図がちゃんと伝わっていなかったのかもしれないね。

清水 それで思い出したんですが、豊臣秀吉が天下統一後に、側室の一人が陰陽師^{*19}と密通したことに怒って、京都市で陰陽師狩りを行って、九州や尾張(愛知東部)の荒地に陰陽師を大量移住させたというヘンテコなエピソードがあるんです。これについても、従来は専制君主の暴挙という文脈で語られてきたんですが、現在の研究では、朝鮮出兵で農民の多くが渡海してしまった結果、荒廃した九州や尾張の農地を復興させるための植民政策だったのではないかと言われています(参考…三鬼清一郎「普請と作事」『日本の社会史8』岩波書店)。集落や都市を人為的に移動するって、そうそう簡単にできることではないだけに、たまにそれを実現する権力が現れると、往々にして意図が曲解されたり、変な尾ひれが付いたりするのかもしれないですね。

外部の力を借りてローカルな神を克服する

清水 イブン・バトゥータはスルタンムハンマドに対して愛憎半ばしているところがあるのか、この王は残酷な一方で、非常に寛大な人物でもあって、ムスリムとしても折り目正しくて、というふうに、英雄っぽくも描いているんですね。

高野 織田信長みたいですね。

ギヤース・ウッディーン・ムハンマド・シャー二世、ムハンマド・ビン・トゥグルクという名でも知られる。トゥグルク朝二代目のスルタン(在位一三三〇〜五二)。彼の在位中、トゥグルク朝の版図は最大となり、北はヒマラヤから南はインド南端のコモリン岬まで支配が及んだ。

***15** ダウラト・アーバード インド西部、マハラシष्टラ州の都市。デリーから直線距離にして二〇〇キロほど離れている。

***16** 石弩砲 古代から中世にかけて使われた据え置き式の大型弩砲。石弾や大型矢を発射して、白兵戦の支援や攻城兵器として使用した。

***17** 讀賣新聞の読書委員会 二〇名前後の作家・研究者

などで構成され、毎週日曜日に交代で紙面に書評を発表する。隔週で委員会が開かれ、書評対象書目について討議を行う。任期は二年。他紙では書評委員と呼ばれることが多い。清水は、二〇一六年一月〜一七年二月在任。

***18** 出口治明(一九四八〜) ライフネット生命保険創業者。立命館アジア太平洋大学(APU)学長。三重県生まれ。世界史を中心に幅広い教養をもつ読書人として知られる。著書に『人生を面白くする本物の教養』(幻冬舎新書)、『全世界史』講義Ⅰ・Ⅱ(新潮社)など多数。

***19** 陰陽師 古代〜中世に陰陽道に基づき吉凶を占い、その対処のための呪術作法を行う宗教者。

清水 あ、ほんとそういう感じ。宣教師のルイス・フロイス^{*20}が書いた『日本史』に出
てくる信長の描写と、イブン・バットゥータの描くスルタン・ムハンマドは似ている
んですよ。信長もキリスト教徒にやさしくて、新しい時代をつくってくれそうな人物
なんだけど、ちょっと人間的には気が短すぎて感心しない、という印象をフロイスは
もっていますね。

高野 スルタン・ムハンマドがイスラムの権威をすくぐく大事にするところも興味深
い。八〇年も前にモンゴルに滅ぼされたアッパース朝^{*21}のカリフが絶対的だと信じて疑
っていないくて、エジプトにいるその子孫に貢物を贈って、インドの代表統治権を授け
てもらったりとかして。

こういうのを見ると、日本の天皇制もあんな感じで広まっていったんじゃないかな
って思うんですよ。日本国内の辺境にいる人たちも、天皇を見たことはないけど、都
にはそういう方がいらっしやる、逆らっちゃいけないって思うようになって、天皇制
は急速に津々浦々にまで広まっていったということでしょう。やっぱり日本において
は、天皇制というのは宗教だったんじゃないかなって気がしたんですよ。

清水 この本には、マルディヴ^{*22}（モルディブ）の人たちがイスラムに改宗した理由が書
かれていて箇所があるじゃないですか。僕はむしろこっちのほうに天皇制の役割に近
いものを感じました。海のほうからやってくる魔物に対して人々は生娘をいけにえと
して差し出していたんだけど、あるとき旅のスーフィーが現れてコーランを朗誦して

魔物を追い払った。それで、モルディブの人たちはイスラムに改宗した。

高野 タイやミャンマーの場合だと、仏教がそんなふうにして広まっていくんですよ
ね。

清水 ええ。このモルディブの話は、ササノオ^{*24}が出雲のヤマタノオロチを退治する伝
説とも似ていますよね。ササノオの伝説は、新たな王権が土着の神や迷信に縛られて
いる人たちに、より普遍的な価値観を教えて、支配を広げていくという図式ですね。

『今昔物語集』^{*25}にも同じような話があるんですよ。近江国^{*26}（滋賀）にもすごい巨木
があって、この木の陰になる村々では百姓が田畑をつくることができないうし、切り倒
すこともできない。そこで百姓が天皇にそのことを伝えると、天皇から使者が派遣さ
れて、無事に切り倒すことに成功する。おかげで村々は田畑をつくって豊かになった
という（巻三二第三七話）。これも、土俗の霊的存在に縛られていた人たちを、天皇が
巨木を切ることで文明化したということですよ。

高野 そういえば（笑）、奄美のケンムン^{*27}っていう妖怪について調べていたときに資
料で見た話があって。ケンムンは、ガジュマルとか、アコウといった巨木を住処^{*28}にし
ているんですね。で、ある原っぱに巨木が生えていて、村の人たちはケンムンが怖い
から、その土地を使えない。ところが、第二次世界大戦後、闇市とか密輸みたいな違
法行為が増えたんで、GHQ^{*29}（連合国軍総司令部）の命令で新しく刑務所をつくらなき
ゃいけなくなりました。で、その土地を切り開くことになったら、村の人たちは半分恐れ

*20 ルイス・フロイス
（一五三二～一五九七）
ポルトガル人のイエズス会
宣教師。一五六三年に来日
し、畿内・九州で布教を展
開。織田信長や豊臣秀吉の
動静や日本社会の情勢を記
した著書『日本史』をまと
めた。

*21 アッパース朝（七五
〇～一二五八）
イラクを中心に西はイペリ
ア半島、北アフリカ、東は
中央アジアまで支配したイ
スラム王朝。通商、農業灌
漑、繊維産業などが発達し、
この時代に東西交流は隆盛
を極めた。首都バグダッド
は産業革命以前、最大の都
市だったとも言われる。

*22 カリフ
イスラム共同体もしくはイ
スラム国家の最高権威者。
元来、神の使徒である預言
者ムハンマドの後継者を意
味する。一九二四年、オス
マン帝国のカリフ制が廃止

されて以降、現在に至るま
でカリフは不在である。

*23 マルディヴ
インド洋北部のサンゴ礁の
諸島。南北一〇〇〇キロに
わたり約二〇〇〇の島々が
あり、現在では漁業や観光
業が盛ん。

*24 ササノオ
素戔嗚尊。『古事記』『日本
書紀』『出雲国風土記』に
見える神。イザナギの子で、
アマテラスの弟。その粗暴
さのために高天原を追放さ
れ、出雲国でヤマタノオロ
チを退治する。もともとは
出雲系氏族の祖神だったの
ではないかと推定されてい
る。

*25 『今昔物語集』
平安後期（一二世紀初め）
の説話集。作者不明。内外
の説話一〇四〇話を編集し
た日本最大の説話集。民衆
生活史の史料としても価値
が高い。

ながらも、半分喜んで木を切ったっていうんですよ。「マッカーサーの命令だから切ってもいいんだ」って(笑)。

清水 新たな強大な権力がやってきたおかげで、それにかこつけてローカルな神を乗り越える。ローカルな神って、やっぱり克服するのはそう簡単じゃないんですよ、きっと。

高野 そうそう。ローカルな神って、必ずしもいい神じゃなくて、怖かったりもするんで、それを克服するために外の力を借りるんですね。

主人公の遭難と遠大なる伏線回収

清水 イブン・バットゥータはインド滞在中に、とうとうスルタンムハンマドに謀反の疑いをかけられて、一時、軟禁されちゃいますよね。まあ、その前から、ヤバイ所に来ちゃったなと感じていただろうけど。

高野 あんな暴虐なスルタンに長く仕えていたら、処刑されるのは時間の問題っていう気がしますよ。

清水 うん、長くはない。ところが、釈放されて隠遁生活いんどんをしていたら、スルタンの命で中国に使者として派遣されることになり、港に向かう道中で武装した異教徒の集団に襲われて、急転直下、捕虜になってしまう。あの展開は映画的ですよ。

高野 そうそう。それまでは庶民の暮らしなんて、あまり描かれていなかったのに、急に村とかに入っていくんですよ。

清水 集団の一味が彼を殺そうと相談しているくだりとか、迫力がありますよね。

高野 イブン・バットゥータも、なんとか助けてもらおうと訴える。

清水 あらかじめ見張り役に自分の下着の両袖を切り取って渡しておいて、もし自分が逃げて、見張り役が「逃げられました」と言い訳できるようにしておいてあげるとか、ディテールも細かい。

高野 捕まった場所から逃げるときはそういう手を使うんだという知識を当時の人たちはもっていたんでしょね。

清水 この遭難話は第六巻に出てきますけど、イブン・バットゥータが一人で逃走しているときにスフィーに助けてもらおうじゃないですか。そのスフィーは、実は第一巻で描かれている、旅の始まりの頃にエジプトで出会ったスフィーの長老の門弟なんですね。しかもその長老スフィーはイブン・バットゥータに、要約すると「そなたはメッカ巡礼を遂げ、メディナ*28にある預言者ムハンマドの聖墓を参拝した後、イエメンとイラク、トルコ、インドを遍歴し、インドには長く留まるに違いない。インドでは私の門弟と会うだろうが、そのとき彼はそなたに降りかかっていた危険を取り除いてくれるだろう」って予言しているんですよ。こんな長い旅行記で、ちゃんと伏線回収ができていって、感心しました。

*26 ケンムン
奄美大島の妖怪。高野は『アジア未知動物紀行』（講談社文庫）においてケンムンのルボを書いている。

*27 G HQ
第二次世界大戦後、連合国軍の日本占領中に設置された総司令部。最高司令官はアメリカの陸軍元帥であるダグラス・マッカーサー（一八八〇～一九六四）。

*28 メディナ
サウジアラビア西部の都市。ムハンマドはこの地で没し、彼の墓がある。イスラム教の聖地。第三代カリフまでイスラム国家の首都であった。

高野 二重の意味で奇跡ですよね(笑)。

清水 ところが、中国に向かおうと船出した後、嵐で船が座礁、大破して、随行員の多くは死んでしまし、中国皇帝への贈り物も失ってしまし。

高野 ああなったら、もうインドへは絶対に帰れないですよ。だって、あのスルタンの命令で中国に派遣されたんだから。うっかり帰ったら、責任を問われて腰から真っ二つの刑ですよ。

清水 イブン・バットゥータ自身、スルタンに追及されたらどうしようという不安がよぎって、中国渡航をいったんあきらめ、インドに帰るのもやめちゃうんですね。

大好きの旅行家がたどり着いたリゾートアイランド

清水 あと、これも読んで感じたことなんですけど、イブン・バットゥータって、かなり女好きですよ。アラブ圏を出てインドに行く前、アナトリア^{*29}を旅している頃から羽目を外しだして、女奴隷をいっぱい買って愛人にしていますよね。彼の旅の一行は何人の女奴隷で構成されているんだろうって思って、本を読みながら数えてたんですけど、途中から数が合わなくなって。モノみたいに扱って、買ったり売ったりしているのがちょっと怖くもある。彼女たちはムスリムなんですか。

高野 どうなんでしょう。ムスリムは神の下で平等なので奴隷じゃないはずですけど、

私のアラブ人の友人は、「昔から敵のことは『あいつらは本当のムスリムじゃない』と言って戦争するのがイスラム世界の常套手段だから、戦争でムスリムの奴隷も生まれてきた」って言ってますね。

清水 このあいだ、我が家に届いた学会誌に「初期イスラーム時代の奴隷女性と境域の拡大」(清水和裕著、『歴史学研究』九五〇号、二〇一六年一〇月)という論文が載っていて、それによると、やはりイスラム教徒を奴隷にすることは原則的にはないみたいです。ただ、奴隷といっても「家族の一員」であるという認識があったので、女奴隷に売春をさせて主人が金をもうけるのは厳禁だったそうです。イブン・バットゥータも、主人が女奴隷に売春をさせている地域を通過したとき、そういう行為についてかなり批判的な書き方をしていますよね。

高野 女奴隷は歌ったり踊ったりのエンターテイナーで、日本の遊女^{*30}みたいな人たちも大勢いたようです。それから戦争捕虜が多かったので、教養レベルの高い人もいたらしくて、知識人のいい話し相手になったかもしれないと、そのアラブの友人は言っていました。

清水 それにしても、イブン・バットゥータは、狭義のイスラム世界を出ていってから解放感に浸り切ってますよね。インドから中国に向かう船を手配するとき、女奴隷と一緒にだからという理由で個室を要求するし。

高野 そうそう(笑)。

*29 アナトリア
小アジアをさす古代の地名。地中海と黒海の間突き出た半島の呼び名。現在のトルコの大部分を占める。

*30 遊女
歌舞により客を楽しませ、性的な奉仕も行う職業の女性。日本では、近世になると売春婦としての性格が強まるが、古代〜中世では遊芸と教養に通じた存在ともされた。

清水 中国行きをやめた後、モルディブに行きますけど、そこでも四人の妻と数人の女奴隷と暮らしているんですね。順繰りに夜を約束した妻とともに寝るのが習わしだったと自慢している。

高野 モルディブでは宰相から女奴隷をもらうじゃないですか。そのとき宰相の従者に「マルハタ出身のほうがよかったら、そうするけど」って言われて、「マルハタがいい」って即答するんですね(笑)。

清水 そう(笑)。その前に、マルハタの女性は性行為にかかわるさまざまな秘技をもっているという記述が二度も出てくるから、よほど気に入ってたんでしょうね。とにかく、この人、モルディブが好きですよ。文章も生き生きしている。

高野 人々はきれいで、街路も清潔だったみたいだし、女奴隷のことは別にしても、モルディブって、昔からリゾートアイランドだったんですね(笑)。

ソマリ人はなぜコメを食べ、腰巻をするのか

高野 前に『世界の辺境とハードボイルド室町時代』の対談をしたとき、ソマリ人はホストとゲストの関係をとても重視していて、ホストはゲストを徹底してもてなす、という話をしたじゃないですか。

この本にはその理由がわかるヒントが書いてあって、マクダシャウ(現在のソマリアの首都モガディシヨ)では、外国船が港に着くと、その船でやってきた商人は必ず町の誰かの家の客になって好きだけ滞在して、その間に家の主は商人が持ってきた品物売りさばく、とありますよね。

清水 一宿一飯の恩義みたいな互酬的な関係の中から経済取引が生まれているわけですね。

高野 解説で訳注者の家島彦一さんは、これを「客人と主人との商業関係」によって成立する交易と説明しているんですが、この「主客関係」の文化が今でもソマリ社会には根強く残っているから、ホストがゲストを大事にするのかなと思ったんですね。

清水 なるほど。イブン・バットゥータの時代からの伝統なんですね。

高野 あと、ソマリアの人たちはバターでコメを炊いて食べる、とありますよね。中東や東アフリカではあまりコメはとれないんで、たいてい小麦粉でつくったナンとかチャパティとか、トウモロコシの粉でつくったウガリなんか食べるのに、今でもソマリ人はよくコメを食べるんです。なんでだろうなって不思議に思っていたんですけど、この時代からずっとコメを食べていたんですね。要するにインド文化圏の一部としてすでにコメが流通していた。

清水 イブン・バットゥータ本人はあまりコメが好きじゃないんですね。インドの南西部でもコメばかり食べさせられて、ずっとパンを食べていない、コメは水がなければ飲み込めない、とぼやいている。

*31 マルハタ
現在のインド・マハラ
シュトラ州に住む人々を当
時こう呼んでいた。

高野 われわれからすると逆なのにね。で、ソマリ人の男性は腰巻をしているとも書いてありますけど、ソマリ人は今でも腰巻をして、ふだん外ではズボンをはいていても、家に帰ると腰巻に着替えるんです。そのほうがリラックスするって言って。

清水 それはアフリカでは一般的な服装じゃないんですか。

高野 一般的じゃないですね。むしろインドとかミャンマーと同じで、実際、ソマリ人の腰巻はインド製なんです。だから、そこもイブン・バットウータが旅した頃と変わってない。

でね、家島さんの解説を読むと、モガディシヨはインドのスルタンムハンマドの支配下にあったっていうんですよね。これもけっこう驚きで。かつてソマリランドはイギリスの植民地だったんですけど、政府直轄ではなくて、インド総督の統治下にあったんですね。それを知ったときは、下請けに統治させるなんてひどい話だなと思ったんですけど、昔から政治的にもインドの影響下にあったんではないか。

清水 といっても、中世にそうだったからイギリスもそれにならったというわけではないですよね。

高野 アラビア海でつながっていて近いから、統治しやすいということなのでしょう。陸路だと遠いけど、船ならすぐに行けますから。

第五章

『ギケイキ』

——正義も悪もない時代の
ロードムービー的作品



『ギケイキ 千年の流転』

町田 康著／河出書房新社／1600円＋税

時を超え、現代に生きる源義経の魂が自らの生涯を語る超娯楽小説。室町時代に成立したとされる軍記物語『義経記』（作者不詳）をベースにしつつ、義経や他の登場人物が現代の標準語や俗語、関西弁をしゃべり、カタカナ英語も多用するなど、一般的な歴史小説とはまったく異なる文体で書かれている。キャッチコピーは「平家、マジでいってこます」。『義経記』では、義経の生い立ち、奥州下向、武蔵坊弁慶との出会い、兄頼朝の挙兵、義経の没落と逃避行、そして滅亡、という流れでストーリーが展開するが、本巻が描くのは、義経が頼朝軍に参陣しようと奥州から関東に向かうまで。続きは雑誌『文藝』に連載中で、2021年に全4巻で完結する予定。

町田 康

まちだ こう

作家、歌手。1962年、大阪府生まれ。高校時代から町田町蔵の名で音楽活動を始める。81年、パンクロックバンドINUでアルバム『メシ喰うな!』を発表。97年、初の小説『くっすん大黒』で野間文芸新人賞、Bunkamuraドゥマゴ文学賞、2000年『きれぎれ』で芥川賞、01年、詩集『土間の四十八滝』で萩原朔太郎賞、02年『権現の踊り子』で川端康成文学賞、05『告白』で谷崎潤一郎賞、08年『宿屋めぐり』で野間文芸賞。他の著書に『パンク侍、斬られて候』、『猫にかまけて』シリーズ、『スピンク日記』シリーズ、『人間小唄』、『リフォームの爆発』などがある。

善悪を超えたピカレスクロマン

高野 最近、歴史小説を読んでいて空々しく感じるが増えていますよね。一つには、武士道を体現しているような、きちんとした武士が多すぎる気がするんですよ。だけど、武士も荒くれているだけじゃダメだっていうふうになったのは、世の中が平和になった江戸時代の中期以降、朱子学^{*1}が普及してからじゃありませんか。なのに、室町や鎌倉の時代の武士が正義や倫理を重んじていたり、きっちりとした主従関係で結ばれていたりする。そういう記述が鼻につくようになってきたんです。

清水 だいぶ僕に毒されていますね（笑）。

高野 ああ、やっぱり……（笑）。もう一つはしゃべり方で、「〜でござる」みたいな口調がいつ頃から始まったのかわかりませんが、少なくとも源平合戦の時代に武士が「ござる」なんて言っていたとは思えないんですよ。

清水 いわゆる時代劇言葉ですね。

高野 そうそう。気にならないければ、別にいいんですけど、一回気になりだすと、やっぱり、なんだかなと思ってしまふところがある。

清水 わかります。

高野 わかりますか。

清水 ただ、NHKの歴史番組『タイムスクープハンター』^{*2}の時代考証をやっていた

*1 朱子学
南宋の朱熹（しゆき）（一一三〇～一二〇〇）が大成した新しい儒学。理気説を基本とし、上下関係の秩序を重んじ、人格・学問を磨く実践道徳としての性格をもった。江戸幕府によって官学として保護されたが、日本では中国・朝鮮のような体制教学となることはなかった。

*2 『タイムスクープハンター』
二〇〇八～二〇一五年にNHK総合で放送された異色の歴史番組。俳優・要潤が演じる未来から来た「時空ジャーナリスト」が、日本の歴史上の「教科書に載らない史実」を取材する、「密着ドキュメント」というスタイルで進行する。DVD全六巻。清水は、この番組の室町〜戦国時代の時代考証を担当。

ときも、なるべく当時の人たちがしゃべったようにというかたちを目指したんですが、そうすると視聴者にとってわかりづらいセリフになるんです。結局、視聴者が一番納得するのは時代劇言葉なんですよ。だからステレオタイプのセリフになってしまっただらうけど。

高野 その点、今回取り上げる『ギケイキ』となると、もうすがすがしい。源義経をはじめとする登場人物は、みんな現代のすごく俗っぽい言葉で語ってますけど、当時の人たちがしゃべっていた感じに実は近いんじゃないかなと思いました。

清水 僕もそう思いました。もちろん、このまんまということはないですけど、中世のスピリットみたいなものをくみ取ったセリフになっていきますよね。それと、この義経の、なんていうんでしょう、無軌道で破天荒なところ、ここなんかも中世人らしく描写されています。

実際、原典の『義経記』もそんな感じなんです。特に前半の義経は、どう考えても貴公子ではない。脈絡のない凶暴性を帯びていて、そこが町田康さんのパンクな世界観とマッチしたんでしょう。

高野 これ、ピカレスクロマン（悪漢小説）ですよ。何しろ、正義が存在しないじゃないですか。善か悪かではなくて、強いか弱いかしかない。

清水 町田さん自身、新聞の著者インタビュで「いわゆる歴史小説は、ヒューマニズムを前提としているケースが多い。僕は、人間の世には正義も悪もないと思ってい

ます」と話してますね（毎日新聞二〇一六年七月三日朝刊）。

この物語では、平治の乱（一一五九年）で源氏が平家に負けた後、京都の鞍馬山に預けられていた義経が、平家打倒を目指して、まず奥州藤原氏のいる東北の平泉に向かいますよね。すると途中で盗賊集団と出会って、義経は頭目クラスと戦って皆殺しにしています。それから下総国（千葉北部と茨城の一部）のほうにいる昔の知り合いを訪ねますけど、厄介者扱いされたというんで頭にきて館に火をかける。

高野 中国の兵法書『六韜』を手に入れるくだりもひどいですよね。義経は京都の祈禱僧の鬼一法眼が秘蔵していることを知って、その邸宅に入り込み、使用人の女性や法眼の娘に手をつけて、その書物を盗み出させる。

清水 確かにピカレスクなんですよ。で、これらの話は町田さんの創作かというのと、そうじゃなくて、どれも『義経記』に出てくる話で、もともとの義経がそういうキャラクターなんですよ。

高野 義経は最後は滅びちゃうでしょ。だから、生きている間は自由に暴れさせることができないという物語の仕組みになっているのかなと僕は思ったんですけどね。

清水 ああ、最後に政権を打ち立てるといったエンディングじゃないから。

高野 政権を打ち立てる人は、もうちょっとちゃんとしてなきゃダメじゃないですか。源頼朝や徳川家康が破天荒なキャラのままだと、物語としてつじつまが合わなくなる。だけど、義経は最後はやられちゃうんで、それまでさんざん暴れさせても、読者は納

*3 源義経（一一五九、八九）

平安末期、鎌倉初期の武将。源義朝の九男。平治の乱で父が敗死したことに、より鞍馬寺に預けられるが、後に脱出し、奥州の藤原秀衡の庇護を受ける。兄頼朝の卒後に呼応。先に入京した木曾義仲を討ち、平氏を一掃、屋島、壇ノ浦で敗つて滅亡させた。その後、頼朝と対立し、再び奥州藤原氏を頼るが、秀衡の子泰衡に襲われ、衣川で自刃。

*4 パンク

一九七〇年代のイギリスの若者を中心に広がった、反体制のロック音楽やファッション。また、その若者たちをいう。奇抜な服装や過激な行動で、既存の価値観への反抗を表した。

*5 ピカレスクロマン

下層階級の出身者や犯罪者、アウトローが主人公となり、さまざまな事件や冒

険に遭遇する物語。「怪盗ルパン」や「ブラック・ジャック」なども一種のピカレスクロマンである。

*6 平治の乱

一一五九年、京都で起こった内乱。保元の乱後、勢力を伸ばした藤原通憲（信西「しんぜい」）・平清盛を排除しようとして、源義朝・藤原信賴が起こした。この戦いに清盛が勝利して、平氏政権が誕生した。

*7 源氏と平家

清和天皇の流れをくむ源氏と、桓武天皇の流れをくむ平氏。それぞれ武家の棟梁として二大勢力であった。

*8 鞍馬山

京都市左京区にある北山の一峰。標高約五七〇メートル。中腹に鞍馬寺がある。牛若丸（源義経）が天狗から武術を学んだ伝説で知られる。

得するというね。中国の『水滸伝』もそうですよね。

清水 世間から逸脱した存在だからこそ、最後は滅びるといふ仕組みになっていると考えることもできますね。

中世の社会と人々の心性を義経が自ら徹底解説

高野 『ギケイキ』では、『義経記』には書かれていないことを義経自身が説明している箇所も多いですよね。

清水 そうそう。それがかなり適切な説明なんですよ。

高野 たとえば、京都を出て平泉に出発する義経は「ファッション」にすごく気を使いますよね。なぜなら、地方の有力者である藤原氏は、武力と財力もっているけれども、所詮は田舎者だから「華やかな生活」を決定的に欠いていて、彼らはそれを渴仰しているからだ、と、義経本人が力説する。

そんなことは当時の人たちにとっては言うまでもないことなんで、『義経記』には書かれていないわけですけど、『ギケイキ』は義経の魂が現代も生きていっているという設定だから、中世を俯瞰で説明できるわけですよ。主人公である義経が中世社会の解説も兼ねている。

清水 義経が自身のアイデンティティについて、原典を補足する感じで語っていると

ころもあって、「寄る辺のない、がために剛直な、自分の身内が辱めを受けたらそれを自分の恥辱と考えて復讐にいく、みたいな素朴な人間」とありますね。現代語を使いながら中世人の心性を非常に的確に説明している。

高野 それから武蔵坊弁慶の生い立ちのところ。最初に熊野別当 弁聖が、右大臣と婚約している姫君をさらって自分のものにしちゃうでしょ。それで後に弁慶が生まれることになるわけですが、怒った右大臣は院（上皇）に通報して、熊野との間で戦闘が起きるんだけど、なかなか姫君を奪還できない。

清水 これもなんかね、原典にもあるエピソードなんですが、すごい話で。

高野 ほんとメチャクチャです。で、院庁では幹部会議を開くんですけど、実は出席者全員が心の底から「どうでもいい」と思っていたと義経は解説するんですよ。「女をとったのとられたのと、そんなことは、はっきり言って家のなかで解決してほしい、にもかかわらず、それを院庁マターにして、こんな大事にするなんていったいなにを考えているのだ」。そうみんな思っていたと。

清水 その通りだったでしょうね。

高野 すごくリアルですよ。僕が会議に出ていたとしても、きっとそう思ったにちがいない（笑）。

清水 起きている事態は深刻だけど、それまでが茶番ですからね（笑）。

高野 でも、重要な場で茶番劇が起きていっているというのは、現代でもよく見られるこ

*9 奥州藤原氏

平安中〜後期の東北地方の土豪。平泉を拠点に権勢とした地方文化を開花させた。初代清衡は後三年台戦で滅んだ清原氏の遺領を受け継ぎ、中尊寺金色堂を建立。二代基衡は毛越寺、三代秀衡は無量光院を建立した。四代泰衡のときに源義経をかくまった罪で源頼朝に討伐され滅亡した。

*10 『六帖』

古代中国の兵法書。文韜・武韜・龍韜・虎韜・豹韜・犬韜の全六巻六〇編。周の太公望の作と称されるが、魏晉時代の偽作。

*11 祈禱僧

病氣や災難から身を守るための祈禱をする僧侶。本対談の底本である『新編日本古典文学全集 義経記』および町田『ギケイキ』は鬼一法眼を園城寺の祈禱僧とするが、他の話本では陰陽師法師とする。

*12 武蔵坊弁慶 生没年不詳

平安末期の僧、源義経の部将。熊野別当の子で、比叡山西塔の僧だったが、武芸を好み源義経に従ったとされる。怪力無双の荒法師と伝えられ、義経没落に際しては、安宅関で危難を救い、衣川台戦では立ち往生を遂げたなど、数々の伝説をもつ。

*13 熊野別当

紀州熊野三山における実務上の最高職。一一世紀初めに出現し、以後、熊野別当家の世襲職となる。熊野別当家は紀伊国牟婁郡・日高郡で在地領主化し、湊快（たんなかい）・湊増（たんぞう）の活躍により勢力を拡大した。

*14 右大臣

太政官の官職名。太政大臣・左大臣に次ぐ官職。原典『義経記』は、この右大臣を藤原師長（一一三八〜九二）としているが、すべて架空の話である。

とじゃないですか。

清水 比叡山延暦寺^{*17}を出た弁慶が、兵庫県の書写山^{しよやま}山円^{さんえん}教寺^{きょうじ}に修行に行つて大暴れして、寺が焼失してしまふくだりも面白いですね。院と書写山は所領の帰属にまつわる問題も抱えていて、そこでも院は解決のための主導権をなかなか発揮できない。

その理由について義経は「あの頃の土地所有は複雑でひとつの土地にいろんなレベルで利権を有する者がいて、現地スタッフもそれに対応しているんな系統に分かれていたので一片の命令書で直ちに事態が動くわけではなかった」と説明を加えているんですよね。こんなに適切に荘園制の解説ができるとは、義経、すごいなと思います(笑)。

武士とヤクザが一体だった時代

高野 あとね、『ギケイキ』の中で義経は、兄の頼朝について「あの人の場合は、意識的に田舎者になった節がある」という言い方をしてるでしょ。これ、鋭くないですか。

清水 僕もそこ傍線を引きました。さりげなく鋭いと思います。

高野 ですよ。頼朝はあえて関東の田舎者になったからこそ、田舎者の世界でトッブを張られた。

清水 その選択は正しかったということですよ。鎌倉武士からも、高貴な人なのにオレたちのことをわかってくれるというシンパシーを得られるし。

高野 前回の対談で、平将門は天皇を名乗ったのに頼朝がそうしなかったのはなぜかという話になったじゃないですか。これに関しても、やっぱり頼朝は京都のことをよく知っていたというのが大きかったんだらうなと思いましたがね。本物の権威というのがわかってた。だから自分が天皇になるなんて考えもしなかった。

清水 田舎者になって、京都とはある程度距離をとっておいたほうが賢いっていうふうに考えたんでしょうね。

高野 ただ、『ギケイキ』や『義経記』に描かれる荒くれの世界そのものは、『将門記』の世界に通じるものがありますよね。将門の乱は九四〇年に終わるから、二五〇年ぐらいたっているけど、あまり変わっていない。

清水 まあ、武士って、もともとそういうものだったんじゃないですか。

高野 ちょっと脱線しますと、以前、タレントのなべおさみさんが書いた『やくざと芸能と』(イースト・プレス)という本を読んだんですけど、なべさんというのはヤクザになりたかった人なんです。

清水 へえ、そうなんです。昔、『ルックルックこん^{*19}にちは』^{*19}でやってた「ドキメント女のど自慢」の司会のイメージしかなかった。

高野 いや、ぜんぜん違うんですよ。若い頃は荒ぶる血を抑えられないようなケンカ

*15 院(上皇)
天皇を退位した上皇・法皇などの御所。また、上皇・法皇に対する尊称。

*16 院庁
上皇が政務をとる場所。その組織。別当・判官代・藏人、その他の院司を構成員とした。

*17 比叡山延暦寺
滋賀県大津市にある天台宗の総本山。七八八年に最澄が開き、嵯峨天皇により大乘戒壇設立が許可され、延暦寺の寺号が下賜された。古代から中世にかけて衆徒三〇〇人を誇る大寺院となり、しばしば世俗権力にも対抗した。

*18 書写山円教寺
兵庫県姫路市にある天台宗別格本山。九六六年、性空(じょうくう)により開山。「西の比叡山」と称される壮大な伽藍を誇る。なかでも大講堂・食堂・常行堂

(いずれも重要文化財)は、数多くの映画・ドラマのロケ地としても使用されている。

*19 「ルックルックこんにちは」
一九七九(二〇〇一年)に日本テレビ系列で放送された朝のワイドショー。「ドキメント女のど自慢」、ヨネスケの「突撃・隣の晩ごはん」は名物コーナー。なべおさみ(一九三九)は「ドキメント・女のど自慢」の初代司会を一九九一年まで務めた。

っばやい人だったんですけど、本物のヤクザに「お前、育ちがいいんだからやめたほうがいいよ」って言われてやめたそうなんです。だけど、なべさんは今でもヤクザの世界にシンパシーを感じているらしくて、その本の中で、「ヤクザの本質は武士と同じだ」って主張しているんですね。農耕民は汗水流して稲を育て、商売人は金を稼ぐために精を出す。堅気は生活第一なんです。でも、ヤクザと武士は「男らしさ」のために生きる、と。なべさんはそこまで言っていないけれど、世の中には力で片づけなくてはいけないことが必ずあって、それを一手に引き受けてきたのが武士でありヤクザだっていう印象を僕はもちました。

清水 それは合っているんじゃないですか。氏家幹人^{みきと*20}さんという近世史の研究者が、そのものずばり『サムライとヤクザ』（ちくま文庫）という本を書いていて、中世までは武士とヤクザは一体だったと述べています。

冒頭で高野さんが言ったことにも関係しますけど、江戸時代になると、武士は支配階層になってサラリーマン化しますよね。統治者としての教養や倫理も身につけていく。だけど、そうすると、戦士^{きょうき}としての俠気を示すことができなくなっていく。そのこぼれた部分を担ったのがヤクザだっていうのが氏家説です。つまり、折り目正しい武士の誕生とヤクザの誕生はパラレルなんですよ。

高野 ということは、やっぱり中世の武士はヤクザ集団、無頼の輩のイメージに近かったということなんでしょうね。

*20 氏家幹人（一九五四）

歴史学者。福島県生まれ。

専門は日本近世史。著書に

『江戸藩邸物語』（中公新書）、『武士道とエロス』

（講談社現代新書）など。

*21 細川重男（一九六二）

歴史学者。東京都生まれ。

専門は日本中世史。著書に

『鎌倉政権得宗専制論』（吉川弘文館）、『北条氏と鎌倉幕府』（講談社選書メチエ）

など。

*22 『吾妻鏡』

鎌倉幕府の歴史書。全五二

巻（巻四五欠）。一一八〇

年の源頼政の挙兵から一二

六六年の前將軍宗尊親王の

京都送還までの八七年間を

日記体で記す。鎌倉幕府研

究の基本史料。

*23 北条義時（一一六三

）（一二三四）

鎌倉幕府第二代執権（在職

辺境の怪書、歴史の驚書、ハードボイルド読書合戦
高野秀行 × 清水克行・著

発 行：集英社インターナショナル（発売 集英社）

定 価：1,500 円（本体）＋税

発売日：2018 年 4 月 5 日

ISBN：978-4-7976-7353-1 C0095

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)